

漢法苞徳塾資料	No. 253
区分	疾病論・病因
タイトル	病因の診定 脈診・切経（触診）・望蒙色など
著者	八木素萌
作成日	1995.03

◎何故、病因の診定が出来るのか？

1. 漢法医学における病因論とは？

外因と内因と不内外因とされ、これがいわゆる三因であるとされてきた。外因は六因〈風・熱・暑・湿・燥・寒または風・寒・暑・湿・燥・火と言うこともある〉として「外感病」の原因となるものであり、この他「疫癘」されている「病状と流行感染性の激しい」病を引き起こす「外因」もある。

内因は七情〈怒・喜・憂・思・恐・驚〉の平衡が失調されることから内傷を招いて「臓病」・「陰病」「血病」などとも言われる内傷病を引き起こすものであると把握されており、不内外因は「飲食・労倦」を略説されるが、「飲食の量の過不足や質の偏り」に由来しているもの・「労働の過剰や休養の不足や偏った労働」に由来するもの・「房事の不摂生」に由来するもの・「その他」＝「外傷」（打撲・捻挫・骨折・刀、槍、銃砲などによる創傷・湯、火炎、蒸気、化学薬品などによる熱傷・毒傷など等）に由来するものによって招来される身体の障害が「不内外因病」とされている。

2. 三因論と診察過程における三因の区分

3. 病因はどのように表現されているか？

病因は『難経』49 難に記述され、それを「李東垣」が『医学発明』に解説しているように、病臓の五行的性質と病因の五行的性質が病状的に並行して「五行的に現われる」、そして、全て体表反応に表現されるものである。

◎蒙色に見られる病因

1. 尺皮と面色

『難経』は「尺皮」（または、尺膚という）に現れている状態が、診断上に非常に重要な意味を帯びていると認識していたことは、「13難」の記述から明らかである。

五臓	肝	心	脾	肺	腎
尺皮の状態	急・青	数・赤	緩・黄	濇・白	滑・黒
脈状	弦而急	浮大而散	中緩而大	浮濇而短	沈濡而滑
※五行	木・風	火・熱	土・湿、勞	金・燥傷寒	水・寒湿

※は「素萌」補充。土金水の部分は『内経』記述と『難経』のものとを合す

このように、脈状と色と尺皮の状態とは、病態論・病因論・蒙色論的には生理病理的に見て矛盾してないと把らえている事がわかる。

漢法医学においては五行の意味内容は広く深い奥行があるので、例えば「木」と言う場合には、「肝」の臓や腑や経脈を示している場合もあれば、病証としての「木」性のもの－胸脇苦満とか頭冒や眩暈や眼の症状やなど－を指している場合もあり、また、病因としての風や部位としての筋が意味している用語となっている事がある。無限定で恣意的な用語では決して無いのである、五行の木に配当されるものに対してのみ用いているのである。

したがって、「尺皮診」では、「五行的に把らえた」状態の把握である、と言えるのである。「四診」を総合して診断を下すのであるから、「尺皮診」の判断のみで診断を決定すると言うのは、あまりにも粗雑なやり方であると言わなければならない。

つまり、「尺皮診」では、

- ・変動している五臓の何れであるのか？
- ・病因としては五行的に見て何であるかを表わしているのか？
- ・病態としては如何なる症候を主としたものであるか？

そして、病状としては、

- ・例えば「熱」なのか？「勞」なのか？
- ・「上部から身体を侵す乾燥した寒さ」なのか？

など等をも示しているのである。

ここでも「尺皮」の微妙な変化と色調の変化を「望診」しているのである。たとえば「尺皮」が「数」と言われる場合を見よう、「濇」の場合よりも腠理の状態は「粒子が少し荒いようだ」「皮膚色は赤味があり、触ると熱の感じがある」、これは、五行的には「火」である。病態的には「熱」である。病因的には「暑か熱」である。病臓としては漢法的な意味合いの「心」である。つまり、皮膚の様子を観察し、色合を見、そして触っている、のである。

2. 蒙色十則の重要性

3. 例えば、病因としての「寒え」と、身体の状態としての「冷え」

◎脈診に見られる病因

1. 菽法と病因

『難経』5難では、3菽・6菽・9菽・12菽・至骨（15菽に相当する）と「菽」について記述している。それを表示すると次表のようになる。

菽	3菽	6菽	9菽	12菽	至骨
脈状	浮而短濇	浮而大散	中緩而大	沈牢而長	按濡拳指来実※
五臓	肺	心	脾	肝	腎
五体	皮毛腠理	血脈	肌肉	筋	骨

※の行は4難の記述

この「難」の記述する処は、謂わばスタンダードな相関関係である。『10難』『13難』『14難』『16難』『38難』『49難』『58難』などの記述を勘案すれば、「部位の正脈と他の臓の脈状とが、混合して現れている場合には、他臓の脈の意味する五行の性質と、同等の五行の意味合いの病因を、指示していることは明瞭である。つまり、3菽の部位に肺の脈状と並んで肝の脈状が含まれていれば、木性の病邪が肺を冒していると判断できるのである。これは『49難』の論理よりももっと明快であるように思える。

2. 部脈において見る病因

3. 脈状に表現される病因

◎触診と病因

1. 臍傍診
2. 経穴
3. 病理的産生物の体表表現

◎病証に表現されている病因

◎内傷病の発症契機について